

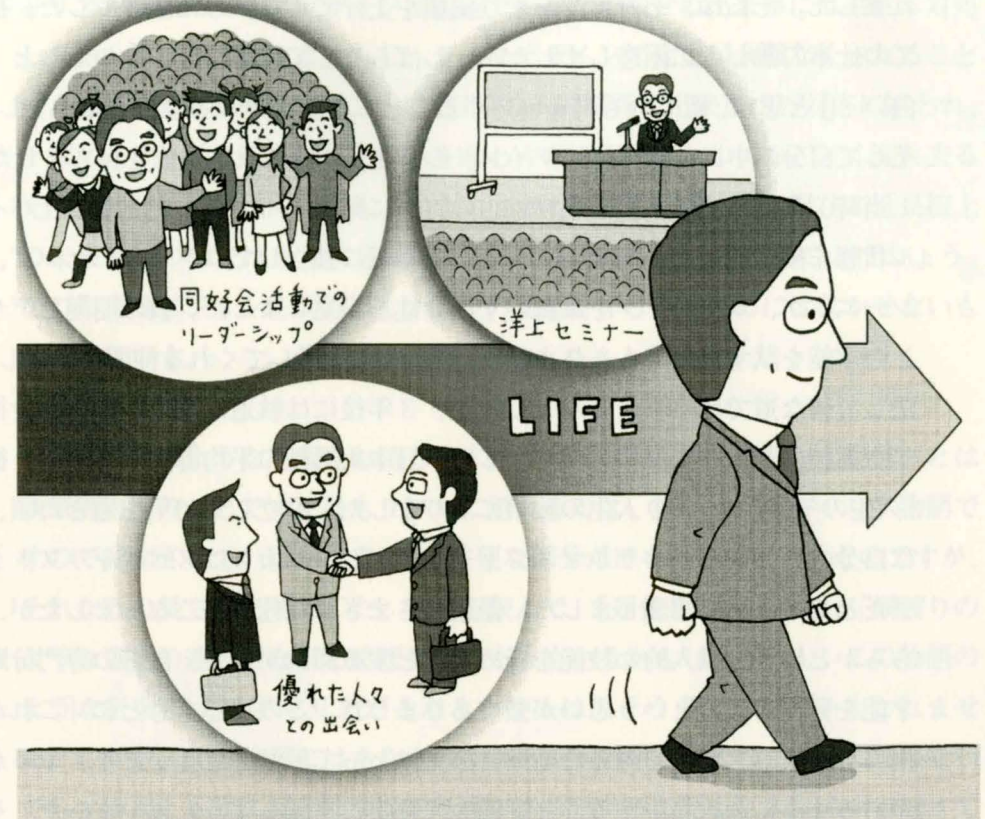
# 1 キャリアを考える

## キャリア物語

最初に、実在するひとりの男性のキャリア物語をご紹介します。

彼が高校1年生の秋、進路選択の機会がありました。迷っていた彼は「これからはブンカの時代だ」と友人が話すのを偶然聞いて「信頼する友人が言うのだから間違いない」と思い、文科系を選ぶことを担任教師に伝えました。その翌日には「文化の時代と言ったのだ。文科系の時代だと言ったのではない」と友人から言われましたが、「まあ、いいか」と大笑いし、そのままの進路にしました。ところがその後、高校が実施した進路適性検査の結果は2回連続で「建築設計デザイン」、つまり理科系だと出たのです。彼は子供の頃から建築物や絵を描くことに興味がありました。確かにその分野は得意かもしれないとも思いました。最初から脱線しているような感じがして迷いました。でも理科系に変更する積極的理由は見つかりませんでした。

結局経済学を専攻した大学時代、同好会活動を通してリーダーシップを発揮することに強い関心を持ち、そこから自己変革を意識するようになり、主将として100名以上を束ねるといった経験をしました。この体験が元で、リーダーシップ開発は彼自身のライフワークのひとつになるだろうと予感しました。そして4年生の時には、長男として実家の父親が経営する会社を継ぐべきか、それともビジネスマンとして大きな組織で優秀な人々とともに働くという「かっこよさ」や「刺激」を選んだほうがよいかなど、さまざまなことを考えた末、結局政治家になるための準備をすることを選びました（青春には未熟さの半面で理想に燃え、周囲を驚かせるような決断をすることがあります。そして夢を抱くのは青春の特徴です）。彼は、「政治の世界のリーダーになって、この国を変えなくてはならない」と思い立ったのです。そのためには「現地現場での実践的な準備期間」が必要だと思いました。また父親の会社は、彼の弟が自ら継ぐことを選んでくれました。弟のほうが明らかにその仕事の適性がありました。



その後、多くの優れた人々との出会いがあり、「地域の活性化とまちづくり」を研究テーマに掲げて活動しながら、積極的に政治活動に向けて準備を進めていきました。そして社会人として7年目、約400名の参加者が船で中国への旅をする「洋上セミナー」の研修部長というボランティア活動を引き受け、参加者の好評を博しました。その翌年には、外資系の研修会社から熱心な誘いを受けました。人材育成にも興味があり、自分には適性があると感じていたので、思い切って入社しました。ちょうど結婚して長女が誕生したばかりで、生活を多少は安定させる必要もありました。「人材育成、とりわけリーダーの育成は、この国の将来にとって最も重要なことだ」と意味づけることによって自分のモチベーションを高く保ち、無我夢中で研修運営の仕事に没頭し、2年後にシニアマネージャー（支店長）になりました。より高いマネジメントのポジションに就きたいという思いは強かったので、そのポジションには満足しました。しかし、意外なことに現場に比べると「面白さに欠ける」という体験でした。その後、本部に戻り、新しい研修サービスを企画開発する小さな部署を任さ



れました。そこは、それまであまり実績を上げてこなかった部署でした。初めての仕事の難しさに困惑しましたが、しばらくして仕事のコツをつかむと「面白い！」と思い、新しいものを創造することにワクワクする感覚を覚えました。そして自分の中に「開発とデザイン」の才能があることに確信を持ちました。

当時、会社は業績不振で業務縮小の方向に向かっていました。そのサバイバル状態を機に彼は自分を奮い立たせ、1年後に独立してコンサルティング、トレーニング、コーチングを業務とする会社を設立しました。彼の開発とデザインの才能を試す機会でもありました。積極的に支援してくれる仲間もいました。決して楽な道ではありませんでしたが、3年後には軌道に乗り、小さな会社ながら業績は安定的に推移してきました。日本人男性の平均寿命からみると彼は「人生の午後」、つまり人生の後半に入りました。設立して10年を過ぎた頃、彼は自分のことを、ゼネラルマネジャータイプというよりはスペシャリストタイプだとあらためて認識しました。器用にさまざまな仕事をこなしましたが、どちらかというとな職人的な技能を極めようとする傾向があり、自分の専門分野で才能を発揮したいという思いが強くありました。この実感をもとに「これから何に集中すべきか」を考えた結果、自分にとって価値と意味があり、やりがいのある仕事に選択集中することを通して社会に貢献しようと思いました。そして仕事の質を重視するためには、目が回るような多忙な日々から徐々に脱却する必要があると思い始めました。何らかの修正が必要になったのです。そこで数年かけて新しいライフスタイルに移行していこうと思いました。

その頃、私生活では4人目の子供が生まれ、6人家族になりました。長女から順番に自立への旅立ちをしていくことになる子供たちと、そしてやがては再び二人という単位に戻っていくことになる妻と過ごす時間にも「優先度」を感じていたので、新しいライフスタイルの模索は必然でした。多忙状態に後ろ髪をひかれる思いもありましたが、折り合いをつけてまあまあ納得のいく選択をしたと思いました。自分にはどんな才能があるか、自分が何をしなければならぬか、何をしたいかがさらに鮮明になってきました。自分にとって犠牲にはできない価値や取るべき責任も明確になりました。振り返ってみると、これまでの人生のすべての選択と出来事には意味があり、それらは有機的なつながりがあるのだという実感を抱いています。

人生という旅路の中で、彼のキャリアはいまだ途上にあります。今後については想定できることもありますが、想定外のことも起きるでしょう。今後のキ

ャリアを含めたライフデザインは明確ですが、予期せぬ出来事には柔軟に対処していかなければなりませんし、ライフデザインの変更が余儀なくされることもあるかもしれません。そしてまた日常の人間関係や出来事への対応に追われ、年末になると「光陰矢のごとし」を味わうのです。しかし矢のごとく流れ去る光陰（時間）の中にあっても、ときには立ち止まり、過去から現在の延長線上の未来を待つのではなく、意識的に自分の未来をデザインすることでしょう。この作業はビジョンを明確にし、人生の充足を作り出すためには欠かせないものだからです。

さて、どのような感想をお持ちですか。実は「実在するひとりの男性」とは執筆者自身のことです。最もリアルに語れるのは、自分自身のキャリア物語です。そこで紹介させていただきました。主要な部分だけを語るにとどめたのですが、それなりの長さが必要でした。物語を読んで、「運任せの人生だな」「綱渡りのような選択の連続だな」と感想を抱いた人もいるかもしれません。この物語のような<sup>うよまいくせつ</sup>紆余曲折のキャリアだったという人は、そう多くはないかもしれません。しかし、この物語にはあなたの物語との共通項がいくつかあるのではないのでしょうか。人生にはいくつかの転機があるということや、人生の中で起きているプロセスがキャリアにも影響を与えていることなどです。そのほかにどのような共通項があるのでしょうか。

- ◆あなたは、この物語のように紆余曲折のキャリア形成をしてきましたか。
- ◆それとも、直線的だなおもえるキャリア形成をしてきましたか。
- ◆今までにどのような成果を作り上げてきましたか。
- ◆今は人生のどこにいますか。
- ◆これからの人生と仕事に何を望み、  
どのような責任をとる用意がありますか。
- ◆そして、何を代償として支払う用意がありますか。

このような問いかけを通して、あなたのキャリア物語を開き始めましょう。